



**CSA 2011年ワーキング・スタディ・ツアー
参加者感想文(寄稿)**

2011 CSAワーキング スタディー ツアーに参加して

UIゼンセン同盟サイボー労働組合 二 戸 智 子

2011 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加したことは、かけがえのない経験になりました。まずは、派遣させて頂いたUIゼンセン同盟・組合また5泊7日の道中を、ずっと引率して下さったCSAの渡邊さんに感謝とお礼を申し上げます。

恥ずかしながら、今回初めての海外ツアーで昨年末パスポート取得から始まりました。とにかく不安と緊張ばかりが先立つツアーの幕開けでした。

最初に着いたバンコクの空港では、その人の多さや近代的な建物に目を見張り、数時間でヴィエンチャンに着いた時は、夜の明かりの少なさに地方の町に来たという印象でした。

翌日、教育省・保健省を訪問し現在のラオスの教育事情、支援事情を伺いその後倉庫視察に行きました。積み重なった衣類支援の段ボールの中で各組合・各会社名(日本語)を確認した時は、確実に我々の支援が届き形になっていることに安堵と喜びを感じました。ナラオ小学校の視察も県の教育長が、現在の学校事情を熱く語ってくれ、いかに子供の未来へ期待を寄せているか、そしてその子供たちに託すラオスの未来への期待、その為の学校教育への支援への期待等に、彼の情熱を感じました。初めて接する子供たちは、シャイで素朴で、言葉が通じたら彼らの声を聞くことができるのにと、残念に思いました。その日の夜に、ヴィエンチャン大学生との交流もあり、彼らの夢や希望・家族への感謝(進学させてもらっていること)・兄弟への思いやりを当たり前語る言葉に感銘しました。

次の視察地ルアンパバンに着いた時は、道路の両端の赤土で家々はほこりまみれトンパンビライ村に着くまでの町並みは、時代を遡る様な風景でした。もちろん学校には、始業のベルもなく時計もガラス窓もない校舎の庭で、楽しそうにサッカーに興じてました。新しいサッカーボールの寄贈には、本当に目を輝かしていました。そして、村人達の歓迎セレモニー。異文化に驚き、村をあげてのおもてなしに恐縮しました。

タイに入国した時は、ラオスとは異なり車も光もあふれ豊かな国に感じましたが、やはり山間部には衣料が不足しているとお話でした。



トンパンビライ村の人たち



ナラオ村小学校の子供たち

このツアーで一貫して感じたことは、我々の衣料支援は続けていかなければならないし、又その活動の輪を広げていかなければと思いました。衣料の支援だけではなく、その輸送費の負担も大きく、各組織がやはりそれなりのカンパ金を支援する声も必要であると感じました。

最後に、このような貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございました。

2011年 CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加して

UIゼンセン同盟 テルモ労働組合 樋川 昌己

「私たちの救援衣類を送る運動が現地の人たちの生活をどのように支えているのかを確認し、自組合が今後、社会貢献活動へどのように取組んでいくべきかを検討する為の足掛かりにする」

これが今回、私が2011年 CSAワーキング・スタディ・ツアーへ参加するに当たって掲げた目標でした。そして、ツアーを終えた今、社会貢献活動をどのように実践していくのかを考える足掛かりとして、「発想の抛り所」のようなものを見つけることができたと感じています。

今回の訪問で最も印象に残ったのは、ラオスの小学生や高校生の屈託の無い笑顔と、現地の大学に通う生徒さんの真剣な眼差しです。彼らが持っている、私たちの支援に寄せる純粋な想いと、自分の未来だけではなく、他の人や祖国の将来にまで想いを馳せる真っ直ぐで力強い眼差しには、心を打たれずにはいられませんでした。一個人としてはもちろん、今後は、「自組合がCSAの活動へ協力する際の推進役を担いたい」と、改めて想いを強くすることが出来ました。

また、私は今、医薬品連盟の社会貢献委員会に参画させて頂いており、自組合では今後、社会貢献活動へどのように取組んでいくべきかを考える、そのきっかけ作りを任されています。

社会貢献という言葉を知ると私は以前、テレビのニュースで見た、地震によって家が倒壊し、困っている住民のインタビューを思い出します。その人は、「こんな惨状になってしまって、自分は援助が必要なのだ。だから今すぐ、援助をしてくれ。」と、涙ながらに訴えていました。もちろん、「可哀そうだ」「何とかしてあげたい」という感情が湧いたのですが、何故か違和感を感じたことを今でも鮮明に覚えています。そして、CSAワーキング・スタディ・ツアーに参加した今、その違和感が何であったのかが分かったように思います。

社会貢献活動はボランティア活動と違い、個人に限らず会社や団体等による公益のための活動も含まれているのはもちろん、その根底には単なる人助けではなく、自分で生きて行く力である「自助」の実現をサポートするといった考えがあると思います。つまり、社会貢献活動を行う上で、自助を促す要素が無ければ、それは一方的な施しであり、被援助者が支援に依存して「援助されるのが当たり前」という意識を持ってしまうようなことがあってはならない。インタビューに答えていた人は、どこか「援助されるのが当たり前」という感覚を持っていたので、違和感を感じ



ナラオ村小学校にて 綱引きに勝って喜ぶ生徒たち



サンティパーブ高校にて 中古衣類寄贈

たのだろうと思います。

今回のツアーを通じて、支援を受けている現地の人たちからは、「自分たちで何とかしよう」と取り組む強い姿勢、意志を感じる事が出来ました。また、CSAの活動は、自助の実現をサポートするために決して出しゃばり過ぎることのないよう、非常に気を配りながら行われていることを知ることが出来ました。そして、社会貢献活動を行うに当たっては単なる物資の救援をするだけでは無く、自分で現地へ赴いて状況を知り、見識を深め、自分が何をすべきかを考えることが重要であり、その経験がどんな経験に勝るとも劣らない成長の機会に繋がると感じました。

今回のツアーで学んだことを活かしながら、自組合での取り組みについても検討を重ね、具体的な活動に落とし込んでいきたいと思えます。

末筆ながら、今回のワーキング・スタディー・ツアーへ参加するに当たり、サポートをして頂いたCSAの渡邊事務局長を始め、ツアー参加者の皆さま、関連諸氏の皆さまに熱く御礼申し上げます。

ありがとうございました。

2011 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

UIゼンセン同盟 島根中井工業労働組合 野村 勇

UIゼンセン同盟の活動の中に、様々なボランティア活動があり、海外で活動するものもいくつかあります。しかしそれは、ある程度大きな組合組織が参加するものだと思い込んでいました。昨年の秋、佐藤島根県支部長から「2011 CSAワーキング・スタディー・ツアー」の参加組合に選出された事を聞いた時は、ただただ驚きました。でも時間が経つにつれ『ぜひ参加してみたい』という強い気持ちに変わっていきました。

地方の小さな組織にもこのようなチャンスを与えて下さいましたUIゼンセン同盟と、地方部会のみなさまに心より感謝申し上げます。

今回のCSAツアーでもラオスの山間地を訪問するという事で、わたしはとても興味深くまた楽しみにしていました。人から、40年～50年前の日本の地方の姿がそこにあると聞かされていました。それを自分の目で確認出来ると思うと、武者震いのような感覚に襲われました。ワンボックスに乗り込み、街を出発後しばらくは舗装された道路でした。この国道1号線をこのまま北上すると中国へと続いているのだそうです。ラオスの道路を見ていて感じたのですが、舗装道路の両側面の1メートル位が、何故か赤土に覆われていました。しばらく眺めていて道路の両端に側溝が無い事に気付きました。側溝がないために、雨が降ったらそのまま赤土が道路に流れ出て、そして乾くのです。その道路を土埃を上げながら、車やバイクが往來します。その土埃の舞い上がる道端でいろいろな物を売って商売をしたり、家族で食事をしているのです。たしかに道路は舗装されていますが、もっと計画的な整備と技術が必要なことを感じました。

国道1号線から脇道に入ると間もなく地道になりました。私は、みんなと歓談しながら



サンティパーブ高校にて



綱引きをする生徒たち

その間、校舎の内外を見学しました。各教室にある木の机やイスは相当使い込まれていました。また、校庭には、竹で三方を囲んだだけのサッカーゴールや手作りのシーソーなどがあり、昔の私達も似たようなものだったかと、どこか懐かしく感慨深いものがありました。ラオスには今後も援助が必要な事が今回のCSAツアーに参加して改めて感じたことです。しかし、援助をしている団体や組織は数多く存在するわけで、それらが個々に援助するよりも、まとまって話し合っただけで行動すればもっと有効な適材適所的な援助が出来るのではないかと感じました。

ツアー最終日はタイのバンコクを少しだけ見学する事が出来ました。空を見上げると東京以上とも思える高層ビル群がそびえ立っています。しかし、地上に目を向けると、線路の左右に小さなトタン小屋の家屋が所狭しと立ち並び、子供たちが線路の上で遊んでいました。貧富の差によって近代化に取り残されたのか、考えさせられる場面でした。

最後に、不慣れな私を快く、そして寛大な気持ちで受け入れて下さいましたツアーのメンバーのみなさま、本当にありがとうございました。また、CSAの渡邊さんには大変なご迷惑と無理なお願いを致しました。

この貴重な体験と経験は、これからの組合活動や地域の活動をしていく上できっと役立つものと信じています。小さく微力な組織ではありますが、『何事にも一生懸命』を心に持ち、常に前を向いて頑張ります。

2011 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

基幹労連 三菱重工労組 鈴木直樹

今回の視察ではCSAで行っている救援衣類を送る運動や小学校建設事業、教育支援活動等について、現地の状況を見ながら深く知ることが出来ました。同時に私自身海外展開する労働運動の拡がりを目の当たりにすることが出来、大変視野が広がった気がしました。

訪問先の印象についてラオスの人々は、我々の支援に対しとても感謝し、暖かく接してくれたので大変感激しましたし、また信心深く活気のある国民性についても非常に興味を持



ヴィエンチャンのタートルアン寺院前にて



サンティパーブ高校寮にて 中古衣類を寄贈

やインターネットが普及し、今や農村部も通話可能地域でありますし、また若い世代もネットを十分活用している様に伺えました。このように情報通信網の発展によりラオスの人々は自国の現状を世界情勢の中で十分認識していると考えられます。それに加え昨今は中国の進出が良くも悪くも取り立たされてきており、30年来、純粋な支援を脈々と続けている日本との関係性も微妙に変化しつつあると感じた次第です。日本としては将来も友好国としての関係を維持できるようにしていかなければなりません。

2点目は今回の現地視察体験を国内でどのように展開すべきか、という点です。折角このように広く世界を知る機会に恵まれながら、帰国後にどれだけ有効活用されているか、情報発信の仕方や仕組み作りが遅れているのでは、と感じております。視察内容の報告や救援衣類活動へのフィードバックについては、参加者各位の産別/単組にて自助努力の方法を模索すれば良いと思います。しかし今回の視察では、現地の方々からは、日本人にもっとラオスに来て貰いたい、もっと交流を深めて欲しい、といった要望を何度かお聞きしました。このようにより身近に、隣国のようにラオスの方々と交流出来る仕組みを作る必要があるのでは、と感じました。

上記2点についてはいずれも今後の支援のあり方を発展的に見直す際の一助になると思います。皆でしっかりとあるべき姿を打ち出し、2国間の将来を見据えた取り組みに繋がっていくことを祈念します。

2011 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

基幹労連 IHI労連横浜支部 生井光男

2011年CSAワーキング・スタディー・ツアーを通じて支援活動の状況や支援する必要性などを学ぶことや貴重な経験をする事が出来ました。

ラオス・タイの保健省倉庫(タイは福祉省)の視察では、各労組から送られてきた救援衣料が山積みになっている中に、私の支部(IHI労連横浜支部)から送った救援衣類の確認ができ確実に支援が役立っていることを確認できました。しかし、私の支部から送ったケー



ヴィエンチャンの倉庫で見つけた我が支部の救援衣類



ナラオ村の生徒たちと

ナラオ村やトンパンビライ村の小学校視察では、子供達が綱引きで遊んでいる姿や、ノート・鉛筆・ボールなどを贈呈したときの目の輝きには心を打たれました。また、トンパイビライ村を訪問した際に隣村の学校で予定になかった、村の皆さん・学校の子供達から歓迎を受け、救援衣類の贈呈式が出来たこと、歓迎会などして頂いたときは、村の人達の暖かさを感じ参加して良かったと思います。しかし、今回時間がないため小学校の訪問時間が少なく子供達との交流があまり出来なかったことは残念でした。

サンティパーブ高校寮でも熱烈な歓迎を受け、ダンスや手料理などのもてなして頂き、有意義な時間を過ごせました。無邪気に踊る学生達を見ていると現代日本が失った素直さや謙虚さを持った学生を今後も支えて行く為の活動の大切さを考えさせられます。

ラオスでは今後、工業に力を入れていくと説明ありましたが、ラオスは内陸部に位置し港もなく大型船が通る川もなく鉄道も整備されていないで輸送が頻繁に出来ない問題があり、発展には時間が掛かるとは思います。貧富の差がなくなるように経済発展を願いますが、ラオスの人達には優しさや謙虚さを失わないようにして頂きたいと思えます。

タイでは、福祉省訪問・福祉省倉庫視察・日本国大使館訪問をし、タイの現状の説明や救援衣類の確認をしました。バンコクの都市規模は東京と同じ位なので、支援がなくても自国で対応できるのではと思いましたが、タイはラオスより貧富の差が激しいようで、教育は行き届いているものの生活は厳しいと言う事です。

最後になりますが、このスタディー・ツアーを多くの人に参加いただき、支援の必要性を理解して貰い支援活動を拡げて行きたいと思えます。また、スタディー・ツアー参加に当たり一緒に参加した渡邊事務局長をはじめメンバーの皆様大変お世話になりました。

スには、仕分け用のシールが張られていないことを確認し喜びも半減しました。現地で仕分けをしている人達には申し訳なく今後は中身が分かるようにしていきたいと思えます。

ラオスの教育省・保健省を訪問し、副大臣に対応して頂き、CSAの支援に対し感謝をして頂きました。会談の中で、学校の数不足していること、教員の人数が不足・レベルが低い・教室の不足や、図書館・図書室の設備などの問題があり、CSAの活動を今後も継続していく必要があると認識しました。



サンティパーブ高校寮前で

2011 CSAワーキング スタディ ツアーに参加して

基幹労連 JFEスチール本社労働組合 石橋 俊彦

まず今回のワーキング・スタディ・ツアーにあたり声をかけていただいたJFEスチール労連の各位、ならびに快く送り出してくれた本社労組の皆様には心からお礼を申し上げます。

また渡邊事務局長をはじめ、他の参加メンバー、そしてメインのラオス滞在中、通訳兼ガイドをしていただいたフンペンさんをはじめ関係各位のご協力により、何とか役目を果たし、無事帰国できた。心からそう思います。皆様ありがとうございました。

初めてのラオス、タイ訪問であったが、小学生の笑顔・素直さ、高校生の明るさ・実直さ、高校寮の卒業生である大学生たちに溢れる希望、また、ルアンプラバンの夜市の人たちの安らぎのある態度、宿泊したホテルの人たちの誠実さ、は強く心に残った。決して物質的には豊かとは言えないが、精神的にはなかなか豊かな生活ではないか、と感じた。

日程もあり、どうしてもラオス中心の感想になるが、報告すべきと思う点は3点ある。まず1つは、『CSAの活動はラオスの人々から感謝されている』ということ。確かに豊かではない。しかし、ラオスの人々はそれを決して恥ずかしいとは思っていない。だから、ラオスの人たちの感謝の気持ちがストレートに我々に伝わってきたのだと思う。

2つ目はタイについても言えるが『日本が官民間問わず長年にわたってインフラ整備あるいは人々の生活支援に大きな貢献をしてきていることが、日本国内に十分伝わっていないのではないか』という疑問である。私自身知らないことが多々あり、不勉強を恥じた。別に自慢する必要はないが、味方となってくれる人たちがいるのに気付いていないのは、もったいないことである。

そして3つ目は『タイやラオスの人々は日本を同じアジアの文化圏と見ている』ということである。約1週間の滞在であり明確な根拠はない。現地で見聞き、直接話す中で私自身がそう感じた、としか言えない。自分がアジアをきちんと向いて理解していなかったからそう感じたのではないかと自身では解釈している。



サンティパーブ高校寮にて英語で挨拶をする



小学生たちと綱引き

個人的な思いも含めて、もう1点付け加えさせていただく。つたない英語でコミュニケーションに努めたが、渡邊事務局長やフンペンさんに助けていただく場面の方が多く、もっと使いこなすことができればと情けなく感じるが多かった。特に関係省庁の訪問時、対応いただいた方々は英語を身につけておられた。今後、両国が経済成長を遂げていけば、そのような方は更に増えるであろう。支援のあり方も高度化・複雑化していくであろうから、直接コミュニケーションを取れるよう支

援する側、される側の双方が努力していかなければならない、と思う。

最後に、私は帰国後、「ラオスの農村部は明治時代、ビエンチャンは高度成長前（昭和30年頃？）、バンコクは高度成長後期（昭和40年代後半？）」と説明している。「ラオスは遅れている」と言いたいのではない。サンティパーブ高校の皆さんの前で僭越ながら言わせていただいたが、日本がかつて経験し、中国が経験している歴史の過程をラオスも歩もうとしている、と思うだけだ。経済成長は家族を中心とした人間関係、そして地域社会を経済を軸に再編成すると思っているが、ラオスは経済成長と家族を中心とした人間関係・地域社会をバランスさせながら歩みを進めて欲しい、そこここに見られた社会主義の旗はそれを実現しようとするラオスの人々の意志の現われではないかと感じた次第である。

2011 CSAワーキング・スタディー・ツアーに参加して

JAM北関東 大場正晴

産別組織として救援衣類を送る運動に取り組んでいますが、今回、現地での活用状況を確認できる貴重な機会に恵まれ参加させていただきました。特に印象に残ったことを報告いたします。

学校建設事業視察ではラオス国において小学校2校を視察しました。まず驚いたのは、決して恵まれた学習環境ではないにもかかわらず、生徒たちがみんな無邪気な笑顔で目をキラキラさせて学んでいる姿でした。物質的な豊かさイコール心の豊かさではないということを改めて実感させられました。

一方で学校建設支援にあたっては、合わせて周囲のインフラ整備も行なっていく必要性を感じました。例えば、トイレも井戸から水を汲み上げておかないと使えない、教室に電灯が設置されていないなどです。また、生徒たちが本に接する機会が少ないことから、図書コーナーなどを教室に設置するなど教育機材の整備も必要であると考えます。

遠隔地高校生支援事業については、高校寮を訪問して寮生の皆さんと交流し、休日の炊事当番をはじめ各自分担しながらの寮生活の姿を見てきました。また、ラオス国トップのヴィエンチャン大学に進学した卒寮生の皆さんとも交流し、その高い志に深い感銘を受けました。



トンパンビライ村小学校 教室の様子



ラオス保健省倉庫 救援衣類を点検

また、ラオス国教育省副大臣表敬訪問時には「学校数や先生の絶対数が大きく不足しているなかで、CSAの学校建設、高校生寮建設は我が国の教育発展に大いに役立っています。」と感謝の意が述べられ、今日までのCSAの貢献度を改めて認識しました。

救援衣類事業では、タイとラオス両国で保管倉庫を訪問し、また小学校などの訪問先で

贈呈式を行ないました。保管倉庫では、日本から送られたダンボール箱を1つ1つ開封した後、男性用・女性用、大人用・子供用にそれぞれ分けて、再度箱詰めしていました。膨大な箱数のため大変労力を要する作業でしたので、構成組織の皆さんが衣類を提供される際に、可能であれば種類ごとに箱詰めして現地の言葉で内容を明記するなどの工夫も必要と感じました。また、衣類贈呈式ではこちらが恐縮するぐらい現地の皆さんから歓迎され熱い思いが伝わりました。その一方で、ラオスへの衣類については陸送する費用が多くかかるため、本来必要とする数が送れないという課題もありましたので、今後、少しでも改善されるよう力になればと思います。

以上、報告とさせていただきます。私自身、初めてのラオスとタイ両国の訪問であり、見るものが全てが新鮮に映りました。特にラオス国の子供たちの純粋さ、人々の暖かさには感激しました。また今日までのCSAの活動が、ラオス・タイ両国と日本との友好関係構築に大きく貢献していることも現地に来てよくわかりました。まさしく“継続は力なり”です。

最後になりましたが、本ツアーで大変お世話になりましたCSA渡邊事務局長様、団員皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

Best Smile Selection ベストスマイルセレクション



編 集 後 記

お蔭様で無事にワーキングスタディーツアーを終えることができました。今年は会員団体からの要望に沿い、日数も10日間から1週間、主な活動先であるラオスのヴィエンチャン、ルアンプラバンとタイのバンコクの3箇所を重点的に視察する旅になりました。

今回のスタディ・ツアーのキーワードはラオスやタイにいる「象」、大きく、優しく、賢い象のようにおおらかな、心のこもった視察団でした。海外が初めての方も、皆さん、それぞれ多くの感動を体験し、楽しみ、今後の活動のための貴重なご意見をいただきました。

各職場で取り組んで下さっている救援衣類配布の実態把握のために訪問した倉庫では、皆、山積みになったダンボール箱の多さに目を丸くし、その中から自分たちの組織のものを探しあて、見つけた箱を宝物のように抱く様は、皆がこの活動のやりがいを感じるひと時です。

また教育活動の重要性にも深く関心を持っていただき、小学校では目を輝かす子どもたちに持参した文房具を手渡し、童心に戻って共に綱引きをし、高校生たちの質問には真摯に答えて下さいました。教育はその国の発展の要であることに新たな感を抱いて下さったことは大きな成果と言えましょう。

今年は、過去のスタディーツアー参加者の熱い想いが実り、4年間のカンパの末、小学校を1校、CSA23番目校として建築・寄贈して下さる組織があります。感謝とともに、スタディーツアーのやりがいと責任を感じます。

タイでは、団員への記念品が障害者訓練センターの作品であったことは、救援衣類が障害者の生活にも役立っていることを認識できたことが活動・支援の幅広さをあらためて気付くきっかけとなったと思います。

多くの方がコメントなされたように、1人でも多くの方にスタディーツアーにご参加いただき、CSA活動の現場を視察いただければ、支援の必要性をより多くの方々に理解いただければ、この輪は、小学校建設、図書の寄贈、さらには高校生への支援と、もっともっと広がるのではないのでしょうか。

ラオスの素朴な人々の笑顔、特に子どもたちの輝く瞳は参加者の方々の心にずっと残っているはずです。

団員の皆様、参加団体の担当者の方々、ご支援いただいたことにあらためて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



アジア連帯委員会(CSA) 渡邊ひな子